手　記

太田治子

手　記

太田治子

新潮社

手　記

定価340円

昭和四十二年三月二十日　発行
昭和四十三年九月三十日　五刷

著者　太田治子

発行者　佐藤亮一
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一

発行所　株式会社　新潮社
電話東京(260)一一一一(大代)
振替東京八〇八番

(乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・株式会社　金羊社　製本・大進堂製本所
© H. Ōta Printed in Japan

目次

手記……五
津輕……一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

手記

手

記

私が、軽井沢で瀬戸内晴美さんに、初めてお逢いしたのは、昨年の八月であった。瀬戸内さんは、私の父の事を小説に書くため、私に、軽井沢に来るように、おっしゃって下さったのだった。瀬戸内さんは私が想像していたより、ずっと優しい方だった。それで、なんだか身内の方のような気がして、私達母子の生活や、今までの生い立ちなどをいろいろお話した。

瀬戸内さんと、お昼をレストランでとっているところへ、偶然、新潮社のSさんが入っていらっしゃった。Sさんと私は、初対面であった。

軽井沢から帰って、一ヵ月たったある日、私のところへ一通の手紙がきた。Sさんからである。私が育ってきた今までのことを、書いてみないかということだった。私は嬉しくて、涙が出た。私は、今十七歳の高校二年生である。文学というものを、知らない。文章を書ける自信

もない。それでもいいと、Sさんはおっしゃった。さらに瀬戸内さんからも激励の手紙をいただいた。私は、真剣に書いてみる気になった。母にこのことを相談すると、

「あなたに、書けるかしら」

母は、むずかしい顔をしたが、しばらくすると、今度はやさしい顔になってこう言った。

「アルバムを、参考にして書いてみたら」

私が生まれた時から、中学二年までのアルバムである。表紙の色は、母と私の好きなブルーである。父もまた、濃いブルーが好きであったという。

アルバムの第一ページには、数枚の父の写真と、父の生家の写真が貼ってある。これらの写真は全部、母にとって意味のある写真だということである。一枚の父は太っていて、いかにも健康そうである。太い眉に皺を寄せているにもかかわらず、笑っている。これは、母が最初に読んだ『虚構の彷徨』の口絵に載っていた写真だという。その隣の父は、久留米がすりのような羽織と着物に、袴をはいている。初めて父と母が逢った年の翌年の写真だということである。父と母が、初めて逢ったのは、昭和十六年の初秋、太平洋戦争の勃発する直前であった。母は一度結婚していたが、折角もうけた子供を病気で失い、夫とはすでに別居していた。その子供は生まれつき体が弱かったのだが、死んだ原因が、夫を愛していなかったことにあったと思い、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その罪の意識で、母は夫との別居にふみ切ったのであった。離婚してから、母は、死んだ子供のため、告白の作品を書こうとしていた。その夏に、母は初めて父の『虚構の彷徨』を読んだのだった。母は、その最初の数行に、心から感動した。「僕はこの手もて、園を水に沈めた」その父と同じように、自分もまた、子供を死なせた。そう思うと、この言葉が心に焼きついて、離れられなくなったという。そして、どうしても、この作者を人生の師として仰ぎたくなったのだという。母は、自分の気持を短い文に託して、父の許へ送ったのだそうだ。父から折返し、遊びに来るようにという返事がきた。それは母にとって思いがけないことで、たまらなく嬉しかったのだろう。父の手紙を胸に、母は近くの草原を歩きまわったという。折からその日は日蝕で、あたりがほの暗かったということを、母は繰返し私に話してくれた。数日後、母は、二人の文学少女の仲間をさそって、三鷹の家を訪ねた。それ以来、父と母はときどき東京駅でおちあい、新宿などを歩いたり、映画をみたりしたそうだ。

それから一年たって、袴をはいている写真の頃、母は「告白の作品」はもう書けないと思い、「書けなくなった私は、先生とお別れしなければなりません」という手紙を父に送った。しかし別れることは出来ないまま、昭和十八年の初冬に下曽我へ疎開した。父は翌年のお正月に下曽我を訪ねている。そして戦争はいよいよ激しくなった。父の一家も津軽へ疎開した。

終戦になった年の暮、母の母が死んだ。半年ほどして、母の弟の通(とおる)叔父ちゃまが南方から復員してこられ、ほっとした途端、叔父ちゃまは結婚して東京へ行ってしまい、母はまた、独りぼっちになった。母は津軽の父へ、終戦の翌年の九月に相談の手紙を書いた。それを契機としてまた、父と母の文通は始った。これが『斜陽』という作品の素材になり、その記念に、父の生家の写真が貼ってあるのだった。

二十一年の暮に、父の一家は上京し、父は次々と作品を書いた。翌年二月になって、梅が満開の下曽我へ、父は来たという。母は、自分の日記、心のすべてを、父の書こうとする小説に投げだして、その作品の中に、自分を見いだしたいと願ったそうである。私が生まれたのは、父が『斜陽』を書きあげて、しばらくたってからであった。

頁をめくって、すぐ目にはいるのは、城前寺の石段の傍に坐っている母とああちゃんの写真である。(ああちゃんとは、母の女学校時代から母の家にいて、それ以来、母にいろいろと親切にしてくれた人である。本当の名前は、柏岡美恵子というのだが、私はどうしても、ああちゃんとしか呼べない。母はお乳が出なかったので、私はああちゃんのお乳をもらって、大きくなった。私の第二のお母さんである)二十二年の晩秋に写したものだという。二人共、お腹が

大きい。その直後、十一月十二日に私が生まれた。ああちゃんの赤ちゃん、繁ちゃんが生まれたのは十二月の中旬だったそうだ。私が生まれた夜は、戦後まもないので、電燈がついたり、消えたりしていたそうである。お産婆さんとああちゃんの励ましの中で、私は生まれたのだそうだ。母に言わせると、生まれた時、私は、そら豆のような顔をしていたという。生まれる前、母のお腹の形からして男の子に違いないと、お産婆さんや近所の人達からいわれていたので、母は男の子の着物しか用意していなかったそうである。それで、私はしばらく、男の着物ばかり着せられていたという。父は、私に「治子」という名前をつけて下さったが、私が生まれてから、下曽我へは、ついにきて下さらなかったそうである。一度でも、逢いにきて下さっていたらと、私はいつも思う。同じ頁に、当時、一緒に暮していた武叔父ちゃま、もう一枚、ああちゃんが、お婿さんの柏岡さんと石に腰掛けている写真がある。

次の頁を開くと、私の写真が何枚か貼ってある。昭和二十三年の正月、生後二ヵ月の写真は、毛布にくるまって、今にも泣き出しそうな、うっとうしい顔をしている。ベビー帽をかぶり、気の強そうな顔をしているのは、生後三ヵ月の時のだそうだ。縁側で、和服姿の母に抱かれているのは、初節句の写真であるという。傍らに、クマのプーさんのような縫いぐるみがある。この熊が、私の唯一の友であったのだろうか。その熊は、下曽我を去る際、行方不明にな

ってしまったそうだ。その頃、父は『人間失格』を書いていたという。母は、父からお金を送っていただいて、のんびりと私を育てていたそうだ。東京へ行くことがこわくて苦しかった母は、別天地のような下曽我で、私を太陽のように明るく育てようと考えていたという。いま母は、あの頃、平気でお金を送っていただいたことを思うと、重い気持になるといっている。六ヵ月の時の写真は、城前寺の庭で、父が亡くなる十日前に写したものだという。母はこれを焼増して、東京の父へ送ったそうだ。父は、この写真を見てくれただろうか。私に一度も逢ってくれなかった父がせめて写真だけでも見ていてくれたと思えば、少しは慰めになる。私を抱いた三十四歳の母は、まだ若い。私は頭を坊ちゃん刈りにして、からっきし男の子のようだ。私は、繁ちゃんと共同で、ああちゃんのお乳を飲んでいた。しかし私は欲張りだったので、ああちゃんのお乳を飲みながら、右手でもう一方のお乳を、繁ちゃんが飲めないように、しっかりと握りしめていたそうだ。よく太っている。生後八ヵ月、十ヵ月、欲張りだった私は、元気に育っていたという。この頃から、私は、ハボタンと呼ばれていた。最初母は、私が男の子のようだったので、ハル坊と呼んでいたが、それがいつしかハボタンになっていた。

初めての誕生日の写真、私は見違えるように大きくなっているが、泣きべそをかいている。おめでたい日に、どうして泣きべそをかいたりしたのだろうか。私を囲んで、その頃、親身に

お世話して下さっていた尾崎一雄先生のお嬢さんの圭子ちゃん、ああちゃんの長男の好ちゃん、それに繁ちゃんがいる。一歳から二歳にかけての写真は、どれも負けん気の強そうな顔をしている。この頃の私は食いしん坊だったらしく、物を食べたり握ったりしている写真が多い。満二歳の誕生日の私は、母の膝の上で、ぐったりとしている。写真の下に、母の字で、消化不良中毒症直後と書いてある。病気になった原因は、食べ過ぎにあったらしい。母は当時、小説を書いていたそうだ。一生懸命書いていたというその小説は『あわれわが歌』であった。そしてそれは題名通り、あわれな結果となった。それを書いた後、生活は全く行き詰ったのだ。母は小説も書けなくなり、手当り次第、物を金にかえていった。そのうち母は大病になった。大病にかかるちょっと前に肺炎を患い、やっと直ったと喜んでいたところだったのである。「矢つき刀おれ」その頃の母は、まさにこの状態であったといえる。母は、母の叔父さま、弟の通叔父ちゃま、ああちゃんに助けられて、東京の逓信病院に入院した。私が三歳五ヵ月の時である。

母が入院したことは、幼い私にとって大きな衝撃だったらしく、それを契機として私の記憶は鮮明になる。母が入院する以前、つまり下曽我時代のことは、二つの断片しか覚えていな

い。下のお家へお風呂をもらいに行く時、梯子を降りていかなくてはならないのが怖くて、いつも泣いたこと。もう一つは、庭の池に咲いていた綺麗な花の思い出である。その花が、睡蓮であったということは、ずっと後になってからわかった。私はその綺麗な睡蓮の花を取ろうとして、池に落ちそうになったことがある。もしその時、誰も見つけてくれなかったら、私は溺れ死んでいただろう。父のように水中で死んでいただろう。

母が入院した日のことを、私は覚えている。私は、ああちゃんと母と三人で、汽車に乗っていた。私は汽車に乗るのが珍しかったので、はしゃいでいた。汽車からおりると通叔父ちゃまがにこにこ笑いながら近づいていらっしゃった。今度は叔父ちゃまも一緒に、自動車に乗った。病院にいくのであった。しかし、幼かった私は、病院という言葉を知らなかった。まして着いた所が病院であるとは知らなかった。病院は、白い大きなお家という感じだった。その日、私は通叔父ちゃまと一緒に、練馬の叔父ちゃまの家に行くことになった。私は、

「ママも一緒に行かなきゃ、いやだ」

といって、駄々をこねた。しかし、

「ママは、あとからすぐ行くわ」

と母がいったので、私はその言葉を信じて、通叔父ちゃまと病院を出た。ふと振り返ると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com